

俗天使

太宰治

青空文庫

晩ごはんを食べていて、そのうちに、私は箸はしと茶碗ちやわんを持ったまま、ぼんやり動かなくなってしまうって、家の者が、どうなさったの、と聞くから、私は、あ、厭あきちやっただ、ごはんを、たべるのが厭あきちやっただ、とそう言っつて、そのことばかりでは無く、ほかにも考えていたことがあつて、それゆえ、ごはんもたべたくなくなつて、ぼんやりしてしまつたのであるが、けれども、それを家の者に言うのは、めんどうくさいので、もうこのまま、ごはんを残すから、いいかね、と言つたら、家の者は、かまいません、と答えた。傍にミケランジェロの「最後の審判」の大きな写真版をひろげて、そればかりを見つめながら箸を動かしていた

のであるが、図の中央に王子のような、すこやかな青春のキリストが全裸の姿で、下界の動乱の亡者もうじやたちに何かを投げつけるような、おおらかな身振りをしていて、若い小さい処女のままの清せい楚いその母は、その美しく勇敢な全裸の御子みこに初い初いしく寄り添い、御子への心からの信頼に、うつむいて、ひっそりしずまり、幽かすかにももの思いつつ在る様が、私の貧しい食事を、とうとう中絶させてしまった。よく見ると、そのようにおおらかな、まるで桃太郎のように玲瓏れいろうなキリストのからだの、その腹部に、その振り拳こぶしげた手の甲に、足に、まっくろい大きい傷口が、ありありと、むざんに描かれて在る。わかる人だけには、わかるであろう。私は、堪えがたい思いであった。また、この母は、なんと佳いのだ。私

は、幼時、金太郎よりも、金太郎とふたりで山にかくれて住んで
いる若く美しい、あの山姥やまんばのほうに、心をひかれた。また、馬
に乗ったジャンダクを忘れかねた。青春のころのナイチンゲー
ルの写真にも、こがれた。けれども、いま、眼のまえに在るこの
若い、処女のままの母を見ると、てんで比較にも何も、なりやし
ない。この母は、伶俐れいりの小さい下婢かひにも似ている。清潔で、少し
冷たい看護婦にも似ている。けれども、そんなんじゃない。軽々
しく、形容してはいけない。看護婦だなんて、ばかばかしいこと
である。これは、やはり絶対に、触れてはならぬもののような気
がする。誰にも見せず、永遠にしまつて置きたい思いである。

「聖母子」私は、其その実相を、いまやっと知らされた。たしかに、

無上のものである。ダヴィンチは、ばかな一こくの辛酸しんさんを嘗なめて、ジョコンダを完成させたが、むざん、神品ではなかった。神と争った罰である。魔品が、できちやった。ミケランジェロは、卑屈な泣きべその努力で、無智ではあったが、神の存在を触知し得た。どちらが、よけい苦しかったか、私は知らない。けれども、ミケランジェロの、こんな作品には、どこかしら神の助力が感じられてならぬのだ、人の作品でないところが在るのだ。ミケランジェロ自身も、おのれの作品の不思議な素直さを知るまい。ミケランジェロは、劣等生であるから、神が助けて描いてやったのである。これは、ミケランジェロの作品では無い。

そんな、いいものを見て、私は食事を中止し、きよときよと部

屋を見廻した。家の者が、うつむいて、ごはんをたべている。私は、「最後の審判」の写真版を畳んで、つぎの部屋へ引き上げ、机に向った。おそろしく自信が無いのである。何も書きたくなくなつた。私はこの雑誌「新潮」に、明後日までに二十枚の短篇を送らなければならぬので、今夜これから仕事にとりかかろうと思つていたのだが、私は、いまは、まるで腑^ふ抜^ぬけになつてしまつている。腹案は、すでにちゃんとできていて、末尾の言葉さえ準備していた。六年まえの初秋に、百円持つて友人三人を誘つて湯河原温泉に遊びに行き、そうして私たち四人は、それぞれ殺し合うほどの喧嘩をしたり、泣いたり、笑つて仲直りしたときのことを書くつもりであつたのだが、いやになつた。なんとも無

い、謂いわば、れいの如き作品である。可もなく、不可もない「スケッチ」というものであるか。あれを、見なければよかつたのだ。「聖母子」に、気がつかなければ、よかつたのだ。私は、しやあしやあと書けたであろう。

さつきから、煙草たばこばかり吸っている。

「わたしは、鳥ではありませんせぬ。また、けものでもありませんせぬ。」
幼い子供たちが、いつか、あわれな節をつけて、野原で歌っていた。私は家で寝ころんで聞いていたが、ふいと涙が湧いて出たので、起きあがり家の者に聞いた。あれは、なんだ、なんの歌だ。家の者は笑って答えた。蝙蝠こうもりの歌でしょう。鳥獣合戦のときの唱歌でしょう。「そうかね。ひどい歌だね。」「そうでしょうか

。「と何も知らずに笑っている。

その歌が、いま思い出された。私は、弱行の男である。私は、御機嫌買いである。私は、鳥でもない。けものでもない。そうして、人でもない。きようは、十一月十三日である。四年まえのこの日に、私は或る不吉な病院から出ることを許された。きようのように、こんな寒い日ではなかった。秋晴れの日で、病院の庭には、未だコスモスが咲き残っていた。あのころの事は、これから五、六年経って、もすこし落ちつけるようになったら、たんねんに、ゆっくり書いてみるつもりである。「人間失格」という題にするつもりである。

あと、もう書きたくなくなった。けれども、私は書かなければ

ならぬ。「新潮」のNさんには、これまでも、いろいろと迷惑をお掛けしている。やぶれかぶれで、こんな言葉が、ふいと浮んだ。「私にも、陋巷ろうこうの聖母があつた。」

もとより、瘦意地やせいじの言葉である。地上の、どんな女性を描いてみても、あのミケランジェロの聖母とは、似ても似つかぬ。青あおさ鷺ぎと、ひきがえるくらいの差がある。たとえば、私が荻窪の下宿にいたとき、近くの支那そばやへ、よく行ったものであるが、或る晩、私が黙って支那そばをたべていると、その小さい女中が、エプロンの下から、こっそり鶏卵を出して、かちと割って私のたべかけているおそばの上に、ぽとりと落してくれた。私は、みじめな気がして、顔を挙げる事が、できなかつた。それから

は、なるべく、そのおそばやに、行かないことにした。実に、恥ずかしい記憶である。

また私が、五年まえに盲腸を病んで腹膜へも膿^{うみ}がひろがり、手術が少しややこしく、その折に用いた薬品が癖になつて、中毒症状を起してしまい、それをなおそうと思つて、水上温泉に行き、二、三日は神に祈つてがまんをしたが、苦しさに堪え切れず、水戸の小さい病院に駆け込んで老医師に事情を打ち明け、薬品を一回分だけ、わけてもらつたことがある。帰りしなに、丸顔の看護婦さんが、にこにこ笑つて、こつそり、もう一回分だけ、薬を手渡してくれた。私は、そのぶんだけのお金を更に支払おうとしたら、看護婦さんは、だまつてかぶりを振つた。私は早く病気を

なおしたいと思った。

水上でも、病気をなおすことができず、私は、夏のおわり、水上の宿を引きあげた。宿を出て、バスに乗り、振り向くと、娘さんが、少し笑って私を見送り急にぐしゃと泣いた。娘さんは、隣りの宿屋に、病身らしい小学校二、三年生くらいの弟と一緒に湯と治うじしているのである。私の部屋の窓から、その隣りの宿の、娘さんの部屋が見えて、お互い朝夕、顔を見合せていたのであるが、どっちも挨拶したことは無し、知らん振りであった。当時、私は朝から晩まで、借銭申し込みの手紙ばかり書いていた。いまだつて、私はちつとも正直では無いが、あのころは半狂乱で、かなしい一時のがれの嘘ばかり言い散らしていた。呼吸して生きている

ことに疲れて、窓から顔を出すと、隣りの宿の娘さんは、部屋の
カアテンを颯さつと癩かんべき癩らしく閉めて、私の視線を切断すること
さえあつた。バスに乗つて、ふりむくと、娘さんは隣りの宿の門
口に首筋ちぢめて立つていたが、そのときはじめて私に笑いかけ、
そのまま泣いた。だんだんお客たち、帰つてしまふ。という抽象
的な悲しみに、急激に襲われたためだと思う。特に私を選んで泣
いたのでは無いと、わかつていながら、それでも、強く私は胸を
突かれた。も少し、親しくして置けばよかつたと思つた。

これだけのことで、やはり、「のろけ」という事になるので
あろうか。こんなことが、私にとって置きの「のろけ」だとした
なら、私は、ずいぶんみじめな、あわれな、野郎にちがいない。

みじんも「のろけ」のつもりでは無いのだ。支那そばやの女中さんから、鶏卵一個を恵まれたからとて、それが、なんの手柄になることか。私は、自身の恥辱を告白しているだけである。私は自身の容貌の可笑おかしさも知っている。小さい時から、醜い醜いと言われて育った。不親切で、気がきかない。それに、下品にがぶがぶ大酒を呑む。女に、好かれる筈は無いのである。私には、それをまた、少し自慢にしているようなところも在るのである。私は、女には好かれたくは無いです思っている。あながち、やけくそからでも無いのである。ぶんを知っているのである。好かれるほどの価値が無いと自覚している人が、何かの拍子で好かれたなら、ただ、狼ろうばい狽ばい、自身みじめな思いをするだけのことで無いかと思

われる。私が、こんなことを言っても、ほんとうにしない人があ
るかも知れないけれど、ばかめ！ おまえみたいな下劣な穿鑿せんさく
好きがいるから、私まで、むきになって、こんな無智な愚かな弁
明を、まじめな顔して言わなければならなくなるのだ。人の話は、
だまって聞いているがよい。私は、嘘をついているのでは無いか
ら。

恥辱を告白している、とまえに言った。けれども、それは少し
言葉が足りなかった。「恥辱を告白することに、わずかな誇りを
持ちたくて、書いているのだ。」と言い直したほうが、やや適切
ではなからうか。みじめの心境であるが、いたしかたが無い。私
は女に好かれることは無いのであるから、ときたまのわずかな、

女の好意でも、そのときは恥辱にさえ思っていたのであったが、いまは、その記憶だけでも大事にしなければならぬのではないか、という頗るすこぶぱつとしなない卑屈な反省に依よつて、私は、それらの貧しい女性たちに、「陋巷のマリヤ」という冠を、多少閉口しながら、やぶれかぶれで捧げている現状なのである。かのミケランジエロのマリヤが、この様を見下して、怒り給うこと無く、微笑してくれたら、さいわいである。

私は、肉親以外の女の人からは、金銭を貰ったことは、いちども無いが、十年まえに、或る種類のめいわくを掛けたことがある。十年まえと言え、二十一である。銀座のバアへはいったのであるが、私の財布には五円紙幣一枚と、電車切符しか無かった。大

阪言葉の女給である。上品な人である。私は、その人に五円しか無いことを言つて、なるべくお酒をゆつくり持つて来てくれるように、まじめにたのんだ。女の人も笑わずに、承知してくれた。一本呑むと酔つて来て、つぎの一本を大至急たのんだ。女の人は、さからわず、はいはいと言つて持つて来た。ずいぶん呑んでしまつた。お勘定は、十三円あまりであつた。いまでも、その金高は、ちやんと覚えている。私が、もそもそしたら、女の人は、ええわ、ええわ、と言つて私の背中をぐんぐん押して外へ出してしまつた。それつきりであつた。私の態度がよかつたからであらうと思ひ、私は、それ以上の浮いた気持は感じなかつた。二、三年、あるいは四、五年、そこは、はつきりしないけれども、とにかく、よつ

ほど後になって、ふらとそのバアへ立ち寄ったことがある。南無三、あの女給が、まだいたのである。やはり上品に、立ち働いていた。私のテエブルにも、つい寄つて、にこにこ笑いながら、どなただったかなあ、忘れたなあ、と言い、そのまま他のテエブルのほうへ行つてしまった。私は卑屈で、しかも吝嗇けちであるから、こちらから名乗つてお礼を言う勇氣もなく、お酒を一本呑んで、さつさと引き上げた。

もう、種が無くなった。あとは、捏造ねつぞうするばかりである。何も、もう、思い出が無いのである。語ろうとすれば、捏造するより他はない。だんだん、みじめになつて来る。

ひとつ、手紙でも書いて見よう。

「おじさん。サビガリさん。サビシガリさんでも無ければ、サムガリさんでも無いの。サビガリさんが、よく似合う。いつも、小説ばかり書いているおじさん。けさほどは、お葉書ありがとう。ちようど朝御飯のとき着きましたので、みんなに読んであげました。そんなに毎日毎日チクチク小説ばかり書いてらしたら、からだを悪くする。ぜひ、スポオツをなさいます様おすすめ致します。おじさんの様に、いつもドテラ着て家に居る人間には、どうしても運動の明るさと、元気を必要としますから。きょうも、またおじさんを、うんと笑わせてあげます。これから書くことは、もつとおしまいに書くつもりでしたけれど、早くお知らせしたく我慢できなくなっちゃったから、書くわ。いったい、なんでしょ

う？ 何しろ、きょう買って貰ったものですからね。私たちがムスメが、それを身につけると、たまらなく海の見える砂丘に立つてみたくなるものです。旅行がしたくなつて、たまらなくなるものです。きょう、銀座のローヤルで見つけて、かえりにすぐ身につけて来ましたの。私、歩くのが嬉しくつて、楽しくつて、自然に眼が足もとへいつてしまうのです。もう、おわかりでしょう。靴なのよ。あたし、きょう、靴ばかり歩いているような気がしましたわ。みんなが私の靴を見つめているような、たいへんな、おごりの気持よ。つまらない？ おじさんは、なんでもつまらない、つまらないだから困るのです。私も、靴の話は、つまらなく思います。

それでは、何が、いいでしょう。きょう夕方、お母さんが『生徒』を読みたいとおっしゃいました。私は、つい、『厭いやよ。』
つて断りました。そして、五分くらい経つてから、『お母さん意地悪ね。だけど、仕方がないわ。困ったわ。』なんて変なことばかり言つて、あの本を書斎から持つて来てあげましたの。今お母さん読んでいらつしやるらしいのよ。かまわないわね。お母さんにわるいことなんか、ちつとも書かれてないんだし、それに、叔父さんだつて、いつもお母さんを尊敬していらつしやるのだから、大丈夫よ。お母さん、叔父さんをお叱りになること無いと思うわ。ただ、あたしが少し恥ずかしいの。どうしてだか、自分でもよくわかりませんわ。あたしは、このごろずっと、お母さんに変に恥

ずかしがってばかりいるの。お母さんだけじゃない。みんなにもつと、平気になりたいのですけれど。

つまらないわね、そんなこと。ふきとばせ、シャボン玉。きのうは、お寺さんと買い物にまいりました。お寺さんの買ったものは、白い便箋びんせんと、口紅と、（口紅は、お寺さんに、とてもよく合う色でした。）それから、時計の皮でした。あたしは、お金入れと、（とてもとても気に入ったお金入れよ。焦茶こげちやと赤の貝の模様です。だめかしら。あたし、趣味が低いのね。でも、口金の所と貝の口の所が、金色で細くいろどられて、捨てたものでもないの。あたしこれを買う時に、お金入れを顔に近づけてみましたの。そしたら、口金にあたしの顔が小さく丸く映っていて、なか

なか可愛く見えました。ですから、これからあたしは、このお金
いれを開ける時には、他の人がお金入れを開ける時とは、ちがつ
た心構えをしなければならなくなりました。開ける時には、必ず
ちらと映してみようと思つています。―それから口紅も買ったん
だけれど、こんな話、やっぱり、つまらない？ どうしたのですし
ようね。おじさんにも、わるいところがあるのよ。あたし、とき
どき、そう思つて淋しくなります。お酒は、しかたが無いけれど
も、煙草は、もすこしつつしんで下さい。ふつうじゃ無いわ。デ
カダンめ。

こんどは、いいお話を聞かせてあげます。なんだか、みんな自
信が無くなつちやつた。犬の話をしようと思つただけ、おじ

さんと私とでは、犬に就いての趣味は全然、反対なのだから、それを考えると、もう言いたくなくなりました。ジャピイ、可愛い
のよ。いま散歩から帰って来たところらしく、窓の下で、ツウア
アなんて、あくびの様な甘え声をたてています。あすは、火曜日。
火曜日っていう字は、意地悪そうできらいです。

ニコウスをお知らせしましょうね。

一、白蘭の和平調停を、英仏えんきよく婉曲に拒否す。

そもそもベルギー皇帝レオポオル三世は、そのあとは、けさの
新聞を読んで下さい。

二、廃船は意外わが贈物、浮ぶ『西太后の船。』

そもそも北京郊外ペキン万寿山々麓の昆明湖、その湖の西北隅、意外

や竜が現われた。とし古く住む竜にして、というのは嘘。

おじさんが、いま牢^{ろう}へはいつているんだったら、いいな。そうすると私は、毎日、大得意で、ニユウスをお送りできるのだけだ。新聞を読むと、ちゃんと書いて在ることなのに、なぜみんな、あんなに得々と、歐洲の状勢は、なんて自分ひとり知っているよ。うな顔をしているのでしよう。可笑しいと思います。

三、ジャピイは、この二、三日あまり元気が無いのです。日中は、ずっとウツラウツラしています。このごろ、急に老けた顔つきになりました。もうきつと、おじいさんになってしまったのでしようね。

四、サビガリ君は、白衣の兵隊さんにお辞儀をなさいますか？

あたしは、いつも『今度こそお辞儀をしましょう。』と決心しながら、どうしても、できませんでした。それが、此の間、上野の美術館に行く途中、向うから白衣の兵隊さんが歩いていらつしやいました。あたし、こつそりあたりを見まわして、誰も居りませんでしたので、ここぞと、ちゃんとお辞儀をしましたの。そしたら、兵隊さんも、ていねいにお辞儀をして下さいました。あたしは、涙が出そうなくらい、うれしくつて、足がピョンピョンはね上がつて、とても歩きにくくなりました。ニユウスは、これでおしまい。

私は、このごろ、とても気取つて居ります。おじさんが私のこ

とを、上手に書いて下さって、私は、日本全国に知られているのですものね。あたしは、寂しいのよ。笑っては、いや。ほんとうよ。私は、だめな子かも知れません。朝、目がさめて、きょうこそは、しっかりと意志を持ちつづけて悔いなく暮そうと、誓ってお床から起き出すのですが、朝御飯まで、とつても、もちません。それまでは、それはそれは、ひどい緊張で物事に当りますの。シャツチョコ張って、御不浄の戸を閉めるのにも気をつけて、口をきゅつと引きしめ、伏眼で廊下を歩き、郵便屋さんにもいい笑い声を使ってしとやかに応対するのですけれど、あたしは、やっぱり、だめなの。朝御飯のおいしそうな食卓を見ると、もうすっかりあの固い誓いが、ふっとんでしまっているのです。そして、

ペチャペチャおしやべりして、げびてまいります。ごはんも、たしなみなく大食いして、三杯目くらいに、やつと思ひ出して、『しまった!』と思ひます。そうになると、がっかりしてしまつて、もうくだらない自分だけで安心してしまふのです。それを毎日、くりかえしています。だめだわね。叔父さんは、このごろ何を読んでいらつしやいますか。私は、ルソオの『懺悔録』ざんげを読んで居ります。先日、プラネタリウムを見て来ました。朝になる時と、日が暮れる時に、美しいワルツが聴えて来ました。おじさん、元気でいて下さい。」

だらだらと書いてみたが、あまり面白くなかつたかも知れない。でも、いまのところ、せいぜいこんなところが、私の貧しいマリ

ヤかも知れない。実在かどうかは、言うまでもない。作者は、いま、理由もなく不機嫌である。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年11月10日公開

2004年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

俗天使

太宰治

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>